

□ 次の文章は島で暮らす四人の高校生（衣花、朱里、源樹、新）が、島に遊びに来ていた環を見送った帰りの場面である。これを読んで後の問いに答えなさい。

環が去ったのは、珍しく、夏なのにうっすらと霧がかかったようになった朝だった。

ヨシノの時と違って長いつき合ではないし、見送りの人の姿も少ない。「じゃあね」と立ち去る環も、別れをそう惜しむ^ア気配もなく、スーツケースの中に運んだ。

「脚本、確かに「アズ」だったから」と言い残して、船の中に消えていく。

フェリーがウ汽笛を鳴らして遠ざかるのを、「公園から、見えなくなるまで見よう」と言い出したのが誰だったか、わからない。勉強したくなかったからか、ただ、なんとなくまだ一緒にいたい気持ちになったからか、衣花たちは、四人で、高台の公園に向けて歩いた。自転車だった源樹も、自転車を引いて、同じ速度で坂が上がった。

その時に、^①どうして^②気持ちが破裂してしまったのか、衣花にはわからない。

歩く途中で、見つめる自分の足元がどンドンぶれて、^③滲んで、まだ公園まで着かないうちに、衣花はうずくまった。

馴れていた、はずだったのに。

ヨシノの時でも、平気だったのに。

これまで何度も、島に残りながら、「行ってらっしゃい」を言い、「行ってきます」の声を聞いた。何故それが今でなくてはならないのか、わからない。

だけど、うずくまったまま顔を隠し、衣花は―、泣き出した。

頭上に高く、太陽が出ていた。エウミベをおおった薄い霧も、山の坂道にはもう見る影もない。自分を隠すものが何もない空の下、衣花の声は、止まらなかった。

朱里が、衣花、衣花、と名前を呼んで自分の肩を揺すっている。源樹が、マジで、という口の形をしたまま、表情を強張らせてこっちを見ているのが、膝に置いた手の間から見える。新が困っているのが伝わる。

どうにかしなきゃと思うのに、止められなかった。

蟬の声が聞こえなくなる。

その時だった。

「衣花！」

何も伝えていないのに、朱里の暖かい手が伸びて、衣花の身体をぎゅっと抱きしめた。声に目を開けると、朱里の顔が―泣いていた。それを見たら、窒息しそうになる。苦しくなる。初めて、衣花は言った。本人に、言った。

「朱里、行かないで」

どうしてそんなことを自分が言ってしまうかわからない。言いながら、だけど、朱里が行ってしまうことはもう知っていた。応援するのだと決めたばかりだ。

引き留められないことは、誰より一番、衣花が知っていた。

^②朱里が目を見開いた。困らせてしまうと思うのに、泣き声が止まらなかった。

朱里が昔、衣花が島に残る、網元の家の決まりごとを知ったばかりの頃、「寂しくないのかな」と自分のお母さんに聞いていたことを、衣花は知っている。「私は寂しいけど、衣花は、寂しくないのかな」と気にしていたことを。それに、朱里のお母さんは「寂しいに決まってるよ」と答えた。

今胸の中にあるものを吐き出さなければ窒息してしまうのだと思ったら、^③絶対に言いたくなかったのに、声が出てしまう。泣いてしまう。

―朱里の祖母に、自分が一言頼めば祖父が折れると言われた、あれは間違いだ。衣花はそんなことを望んでいない。島の外に行きたいなんて、思っではない。

みんな衣花にそれを言うけど、衣花は一度だって外を望んだことはない。網元の家に生まれ、どんな時だって、この島と生きてきた家のが好きだ。困ったところがある父だけけど、母や、祖父と一緒に暮らしたい。

衣花の望みは、ここにいることだ。朱里や、源樹や、新と、ここで暮らすことだ。

祖父にどれだけ望んだって、それは叶わない。彼らはみんなここから出て行く。

自分が女であることが、悔しかった。朱里の祖母の言う通りだ。別れて後悔を遺すのは、男よりずっと、女の方が多い。肉親でもない薄い繋がりを保つためにあるこの島の「兄弟」の契りは、男同士が結ぶものだ。

それを聞いて、昔から、ずっと思ってきた。

本土と島で離れても、朱里が自分の「兄弟」だったらいいのに。朱里が外に出て行っても、そこで誰かと結婚しても、もうここに

戻ってくるのだが、たとえ、なくても。

それでも途切れないものが、自分たちに残ればいいのに。
衣花はずっと、朱里の④「兄弟」になりたかった。

ぎゅうつと自分を抱きしめる手の存在を、その時に感じた。

無言で、何度も何度も、朱里が、衣花の肩をくるみ、抱きしめている。「行かない」と、声がした。

驚いて、驚きすぎて、涙でどろどろの顔のまま、息を呑む。今のは自分のオサツカクだろうかと思いかけたところで、朱里がもう一度、言った。

「衣花が嫌なら、行かないよ」

奥歯を噛んで、朱里の腕をぎゅつと握る。

⑤こらえる、ように。

そうしないと、また泣いて、その言葉に甘えてしまいそうになる。その誘惑に抗うには、ものすごく強い、意志の力が必要だった。

「ごめん」と眩き、朱里の胸を押し返す。

そして、涙まみれの顔を拭って、赤い目をした、朱里を見た。

「ごめん。もう、言わない」

立ち上がると、朱里がまだ、衣花を見ていた。心配そうに自分を気遣うその目を見て、認める気持ちに初めてなった。朱里と同じく心配そうにこっちを見る源樹と新に向け、衣花は同じように「ごめん」と謝った。

「ごめん、ずっと言わなかったから爆発しちゃった。私、来年在るのがものすごく寂しいです」

平気そうな声で言ったつもりだったのに、最後の言葉が、掠れて、つぶれた。

（辻村深月『島はぼくらと』より）

問一 傍線部ア～オの漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 に当てはまる言葉として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 洪々と イ 悠々と ウ 楽々と エ 淡々と

問三 傍線部①「気持ちが破裂してしまった」とあるが、具体的に「衣花」のどのような様子に表れているか。二十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「朱里が目を見開いた」とあるが、「朱里」のどのような気持ちを表しているか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 衣花から予想外の言葉を聞いて驚いている。

イ 衣花が泣き崩れるのを見て心配している。

ウ 衣花に思いがけず本心を知られて困っている。

エ 衣花のわがままな様子を見て腹を立てている。

問五 傍線部③「絶対に言いたくなかったのに、声が出てしまう」とあるが、「衣花」のどのような気持ちが表れているか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 島を出て行きたいなんて思っていないのに、朱里をはじめ周りの人たちが勝手に思い込んでいることに対して困らせてやろうとする気持ち。

イ 島を出て行くことになっている朱里を応援しようと思ったのに、思わず言葉に出してしまうほど心の中では整理がつかず苦しい気持ち。

ウ 本当は島を出て行きたいと思っているのに誰にも言えず言葉には出さなかったものの、朱里にやつ当たりをしてしまうほどつらい気持ち。

エ これまで出て行った人たちには言えなかった分、朱里にはこれからもこの島で仲良く一緒に暮らしていきたいとはっきりと伝える気持ち。

問六 傍線部④「兄弟」になりたかった」とあるが、「衣花」が「朱里」となりたいたいと思っている、この文中での「兄弟」とはどのようなものを指しているか。文中から三十文字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問七 傍線部⑤「こらえる、ように」とあるが、誰のどのような気持ちを表しているか。四十五字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちの身近で、驚くべき生き方をしている植物たちを観察することができます。食虫植物です。①食虫植物は、文字通り、虫を食べる植物です。昆虫Ⅰやその他の小さな動物を捕らえて、消化し、栄養を吸収する植物です。

植物が虫を捕食して生きているのは珍しいので、夏休みなどには、各地の植物園などで、食虫植物展などが開催されます。多くの人に興味がもたれ、機敏に葉を閉じるハエトリソウが人気者になります。この植物は、「ハエトリグサ」や「ハエジゴク」などの名で、園芸店などで市販さⅡれることもあります。

「Ⅲ」というⅣ素朴な質問があります。その答えは、葉に捕らえられた虫を観察していれば、わかります。ハエトリソウは、捕らえた虫から栄養を吸収するために、タンパク質を分解する消化酵素などの液を出し、虫を消化してしまうのです。私たち人間が、肉や魚を食べて、それを消化し栄養を吸収しているのと同じです。

「虫を捕らえて、それを食べて栄養としている」というと、ハエトリソウはいかにも動物のように生きているという印象があります。ⅤA、そうではありません。この植物はふつうの植物と同じように、クロロフィルという緑色の色素をもっています。クロロフィルは葉緑素ともいわれ、文字通り、葉っぱの緑色の素になる色素で、光合成のための光を吸収する色素です。ですから、この植物は光合成を行います。そのため、日当たりの良い場所を好んで生活します。

ハエトリソウは、十分な光と水があれば、光合成をします。だから、光合成でつくることができるブドウ糖やデンプンをほしがってはいません。ハエトリソウがほしがっているのは、タンパク質などの窒素をⅥ含んだ物質です。私たちは、これらの物質を主に肉や魚から得ます。同じように、ハエトリソウも虫を消化して窒素を含んだ物質を吸収します。

ふつうの植物は、窒素を含んだ養分を土の中から吸収します。だから、「なぜ、ハエトリソウは根から窒素を含んだ養分を吸収しないのか」という疑問が浮かぶでしょう。ハエトリソウは北アメリカの出身ですが、原産地となる土地は、窒素などの養分をあまり含まない痩せた土地なのです。だから、これらの養分を根からは吸収できなかつたのです。そのため、これらの養分を補うために、虫のからだから窒素を含んだ物質を摂取する能力を身につけたのです。

「そんな生き方をしてまで、そんな痩せた土地に生きる利点はあるのか」との疑問もあるでしょう。ふつうの植物は、養分が乏しいので、そんな土地には生きていきません。だから、こんな能力を身につけることで他の植物たちに邪魔されずに競争もせずに、痩せた土地で生きていくことができるのです。

②ハエトリソウが虫を捕らえるしくみは、たいへんに巧妙です。この植物の虫を捕らえる葉っぱは、二枚貝の開いたような状態で向き合っています。二枚の葉っぱのまわりには、トゲがいっぱい生えています。この姿は、「女神の眼」にたとえられます。葉っぱの形はⅦ大きな眼のようであり、トゲはそのまわりにあるまつ毛に見立てられます。

B、この植物の英語名は、「女神のハエ取り罠」という意味をもつ「ビーンズ・フライ・トラップ」です。

この葉っぱは、たいへん機敏に動きます。葉の中には三本の感覚毛があります。ハエなどの虫がこの感覚毛に触れると、二枚の葉がピタンと合わるようにすばやく閉じて、葉と葉の間に、ハエなどを閉じ込めてしまいます。

感覚毛に一回触れただけでは、葉っぱは閉じません。二〇〜三〇秒間に連続して二回触れたときだけに、葉っぱは閉じるようになっていきます。これは、風で運ばれてきたゴミなどが触れても、無駄に葉を閉じないためです。

葉っぱを閉じるということは、ハエトリソウにとって、エネルギーを消耗することなのです。だから、無駄には閉じないのです。栽培しているときに、おもしろがって何度も触っていると、葉は枯れてしまいます。植物そのものが枯れてしまうこともあります。

ハエトリソウは、自然の中で養分に恵まれない土地に生まれたために、こんなしくみを発達させ、やむなくこんな方法で生きていくことになったかわいそうな植物です。おもしろがって、空振りや葉を閉じさせないでください。

ハエトリソウ以外にも、食虫植物は、いくつか知られています。捕らえる方法は、植物によっていろいろです。ウツボカズラは、葉が変形したつぼ型の捕虫器をぶら下げているツル性の植物です。モウセンゴケは葉に粘液を分泌したネバネバの毛が生えており、虫が止まると捕らえます。タヌキモの葉は、「捕虫葉」といわれ、袋の入り口を毛で隠しており、そこに入り込んだ虫を捕らえます。ムシトリスミレは、葉面に粘液を分泌しており、そこに止まった虫を捕らえます。

「ムシトリナデシコ」という、いかにも食虫植物のような名前の植物があります。でも、③この植物は食虫植物ではありません。ムシトリナデシコは、ナデシコ科の植物で、「小町草」という、かわいい別名を持っています。

この植物は、茎の葉が出ている下の部分に、ネバネバの粘液を分泌します。そのため、虫が捕まることがあります。だから、「ムシトリ」という名前がついています。でも、食虫植物ではないので、虫を消化することはありません。「それなら、なぜ、粘液を出すのか」との疑問がありますが、「アリが茎を上ってきて花の蜜を奪うのを妨げている」といわれます。

(田中修『植物はすごい』より)

問一 波線部を文節に分けた場合の文節数と、単語に分けた場合の単語数をそれぞれ数字で答えなさい。
問二 二重傍線部Ⅰ～Ⅴの単語の品詞名として適切なものをそれぞれ次のア～コの中から選び、記号で答えなさい。

ア 名詞 イ 動詞 ウ 形容詞 エ 形容動詞 オ 副詞
カ 連体詞 キ 接統詞 ク 感動詞 ケ 助動詞 コ 助詞

問三

A	B
---	---

に当てはまる語として適切なものをそれぞれ次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ そのため ウ しかし エ たとえば オ もしくは

問四

--

に当てはまる語句として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ハエトリソウは、虫を捕らえることができるのか
イ ハエトリソウには、本当に光合成が必要なのか
ウ ハエトリソウが虫を捕らえるしくみはどんなものか
エ ハエトリソウが虫を捕らえて、何の役に立つのか

問五 傍線部①「食虫植物は、文字通り、虫を食べる植物です」とあるが、ハエトリソウはなぜ虫を食べる必要があるのか、四十五字以内で答えなさい。

問六 傍線部②「ハエトリソウが虫を捕らえるしくみ」とはどのようなしくみなのか、四十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部③「この植物は食虫植物ではありません」とあるが、そのように判断される性質が示された部分を十五字以内で抜き出さなさい。

問八 本文の内容と一致するものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食虫植物とは葉の表面に粘液を分泌して虫を捕らえる植物のことを指し、必ずしも痩せた土地に生育するとは限らない。
イ 食虫植物は光合成を行うが、光合成で作ることができないブドウ糖やデンプンを捕らえた虫から吸収する必要がある。
ウ 食虫植物は基本的に痩せた乾燥地に生育しているので、粘液を表面に分泌するという方法で虫を取っているものが多い。
エ 食虫植物が葉を閉じるのはエネルギーを消費することなので、無駄に閉じないようにするためのしくみを持っている。

問題は次ページにつづく。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

頼光朝臣の郎等季武が従者、究竟の者ありけり。季武は第一の手ききにて、下げ針をも外さず射ける者なりけり。件の従者、季武に言ひけるは、「下げ針をば射給ふとも、この男が三段ばかり退きて、A 立ちたらむをば、え射給はじ」と、B 言ひけるを、季武、「やすからぬこといふ奴かな」と思ひて、あらがひてけり。

「もし射外しぬるものならば、C なんぢが欲しく思はむ物を、所望にしたがひて与ふべし」と定めて、「さて、おのれはいかに」と言へば、「これは命を参らする上は」と言へば、「さ言はれたり」とて、「さらば」とて、「立て」と言へば、この男、言ひつるがごとく、三段退きてⅡ 立ちたり。季武、「外すまじきものを。従者一人失なひてんずることは損なれども、意趣なれば」と思ひて、よく引きて放ちたりければ、左の脇の下五寸ばかり退きて外れにければ、季武負けて、① 約束のままに D やうやうの物ども取らず。言ふにしたがひて Ⅲ 取りつ。

その後、「今一度射給ふべし」と言ふ。やすからぬままに、またあらがふ。季武、「初めこそ不思議にて外したれ、② このたびはさりともし」と思ひて、しばし引きたもちて、真中に当てて放ちけるほどに、③ 右の脇の下を、また五寸ばかり退きて外れぬ。

その時、この男、「さればこそ申し候へ、え射給ふまじきとは。手ききにてはおはすれども、心ばせのおくれ給ひたるなり。人の身太きといふ定、一尺には過ぎぬなり。それを真中をさして射給へり。弦音聞きて、そとそばへおどるに、五寸は退くなり。しかればかく侍るなり。かやうのものは、その用意をして ④ こそ射給はめ」と言ひければ、季武、理に折れて、Ⅳ 言ふことなかりけり。

〔古今著聞集〕より）

- ※ 従者……つき従うもの。
- ※ 究竟……力や技術が優れていること。
- ※ 手きき……弓の名手。
- ※ 下げ針……糸でつり下げた針。弓的としてきわめて小さいもの。
- ※ 件……例の。
- ※ 三段……約三十三メートル。
- ※ あらがひてけり……反論した。
- ※ これは命を参らする上は……わたしは命を賭けているので。
- ※ 意趣なれば……意地があるので（仕方がない）。
- ※ 五寸……約十五センチメートル。
- ※ 心ばせ……考え。
- ※ 定……しても。
- ※ 一尺……約三十センチメートル。
- ※ 理に折れて……道理に屈服して

問一 波線部 A～D を現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで答えなさい。

問二 二重波線部 I～IV について、動作の主体をそれぞれ次の A～E の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を何度使ってもよい。

ア 頼光 イ 季武 ウ 従者 エ 作者

問三 波線部 ①「約束」とはどういったことを指すか。それが述べられている一文を会話文の中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。ただし、「 」は字数に含まない。

問四 波線部 ②「このたびはさりともし」とはどういうことか。最も適切なものを次の A～E の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今度は絶対に外さない

イ 今度も外すかもしれない

ウ 今度は少し右側をねらおう

エ 今度は当てるつもりでねらおう

問五 波線部 ③「右の脇の下を、また五寸ばかり退きて外れぬ」とあるが、矢はなぜ外れたのか。四十字以内で説明しなさい。

問六 波線部 ④「こそ」について、このような語があると文末は終止形からどの活用形に変わるか。適切なものを次の A～E の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 未然形 イ 連用形 ウ 連体形 エ 已然形

問七 本文に登場する「季武」は平安時代の人物である。平安時代に成立した作品を、次の A～E の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おくの細道 イ 枕草子 ウ 徒然草 エ 平家物語

問題は以上です。